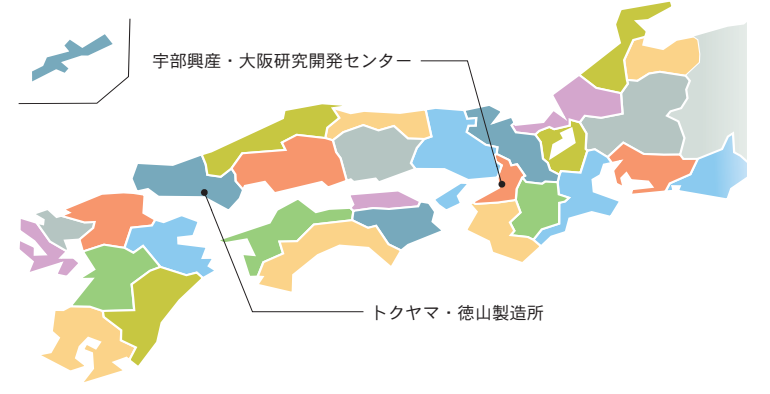




わが社の西日本拠点 ①

関西圏、中部圏はもとより中国・四国、九州など西日本地域は、化学企業の有力な製造拠点や研究開発拠点が多数存在しており、日本の化学産業を根拠から支えている。化学工業日報は大阪支社を中心にその動向を追い、読者に情報を提供してきた。その大阪支社が2017年度、開設70周年を迎える。これを機会に、シリーズ「わが社の西日本拠点-R&D施設、製造拠点を特別レポート」を企画した。本日付を第1回とし、各社の西日本拠点のいまをレポートしていく。



技術錬磨、さらなる発展へ

トクヤマの創業の地、徳山製造所(山口県周南市)は、創業から100年を迎える。アンモニア法ソックスの生産から出発し、現在はクロルアルカリ、エーゼン、セメントといった伝産事業から、半導体用多結晶シリコンや窒化アルミ、ニウムなどの先端材料まで幅広く製品展開する。国内屈指のものづくり基盤を最大限に生かし、世界に飛躍する。徳山製造所長の安達秀樹取締役(執行役員)と新たな歴史を刻むべく、いま成長投資をさらに加速している。



トクヤマ

伝統と先端で世界へ 成長投資さらに加速

石炭火力発電の熱効率は約40%程度であるのに対し、同製造所は60%程度と劇的に優れるのが大きな強みだ。競争力ある動力源を軸に



徳山製造所

原料無駄なく使い競争力

徳山工場は粗製のソーダ灰と塩化カルシウムも手がける。ソーダ灰は同業が生産から撤退したこと国内唯一のメーカーとなり、設備改善を積み重ね、少しくも増産したい(安達氏)と国産品の安定供給に努める。道徳的防止剤に使う塩化カルシウムは今年秋までに粒状塩化カルシウムの生産能力を25%増の年間3000tに引き上げる方針だ。



副産物を含めて廃棄ロスを極限まで減らし製品として有効活用する「オープン・インクレーション」を業き上げてきたことだ。同社の単独売上高の9割を占める安定供給を生み出す原動力になっている。その生産統合の象徴的な事業が南陽工場のセメント事業。石灰石や石灰灰などの原料に加え、廃プラスチックや廃タイヤ、汚泥などを原料として有効活用する。最近では国内に加えアジア輸出を拡大しており、17年度にはロボット技術を活用した品質管理システムを導入も計画する。



トクヤマ 徳山製造所 〒745-8648 山口県周南市御影町1-1



2016年8月に開所。ガラス張りの建物で研究開発の見える化を図っている

宇部興産

車載LiB材料に力 次世代製品創出狙う

研究から量産試作まで一貫

グループの研究開発の新たな中核拠点として2016年8月に新設された宇部興産の大阪研究開発センター(大阪府堺市、関西空港と大阪市の間)に位置し、海外アクセスも容易な同社工場に30億円を投じて建設されたこのセンターで、電気自動車(EV)などに搭載されるリチウムイオン二次電池(LiB)材料の開発を強化している。ポリアミドなどの機能性材料を順次集積し、さらなる拡張も計画している。

LiBをはじめ電池材料分野の需要が急増する大阪の立地を生かし、機能性材料の研究開発の中核を担う拠点として堺工場を一段と変遷させる目的で大阪研究開発センターは設置された。収益の柱となる新事業の創出にも挑んでおり、固体電池用電解質などをテーマに次世代製品の研究開発に力を入れている。

一人である安部浩司フェロだ。これまで国内外の多くの研究拠点を訪問した安部フェロが、その経験から優れていると感じた要素を取り入れてオリジナルな施設に仕上げた。

海外からの来所者も想定し、LiB材料性を考慮して2階に和室を設けた。シートを反射させた部屋のイメージを反映させた部屋で、会議室として活用するほか、日常研究員がリラックスしてアイデアを創出することも期待されている。



開放的なレイアウトで部署の異なる研究者同士のコミュニケーションが容易に

宇部興産 大阪研究開発センター 〒592-8543 大阪府堺市西区築港新町3丁1番地

大阪研究開発センター

250人体制を視野に入れている。設備面でも同規模の建物を増設することでも計画。大阪はかつて枚方市に研究所を構えていたが、拡張の余地がないなどを理由に1995年に閉鎖しており、約20年ぶりの研究開発拠点となる。枚方の研究所は他地域の研究拠点とは異なる独自の雰囲気があるが、弾みをつける。